

# 🎬 動画で考える！ 幼児期の育つ力と外遊び オンライン講座

おやこ森のようちえん in 都立光が丘公園

『おひさまとことこ』 6つのエピソード

舞台は、東京の住宅街にある自然豊かな都市公園です。  
2歳半～6歳が自然に触れ合い自由に遊ぶ！活動を見つめる  
臨床発達心理士、作業療法士、理学療法士、保育士プレーリーダー  
各々の専門性の視点から  
「子どもの育つ力」「外遊び」「大人の関わり」を考える、  
パネルディスカッションスタイルの講座です。

パネラー

臨床発達心理士：齋藤正恵  
作業療法士：元住野花  
理学療法士：得原藍  
保育士プレーリーダー：島田かおり

ファシリテーター

PLAY TANK 代表：中川奈緒美

3月19日(土) 14:30～16:30

プログラム

14:30～16:00 動画視聴&パネラーディスカッション  
16:00～16:15 講座参加者同士のディスカッションタイム  
16:15～16:30 全体での意見交換とまとめ

参加費

2,000 円

お申込み

<https://qr.paps.jp/LUta0>  
※YouTube 見逃し配信あります。



主催／問い合わせ

NPO 法人 PLAYTANK 東京都練馬区旭町 1-16-1  
Tel：070-5021-3299 (担当：島田)  
Mail：playtank.moshikomi@gmail.com  
おひさまとことこ HP：  
<https://playtank.tokyo/playfield/tokotoko>



枝のトンネル発見！一人がくぐれば…



はじめてのトカゲ。見つめる子、手を出す子…



うーんっと、長い枝を持って坂道を登る…



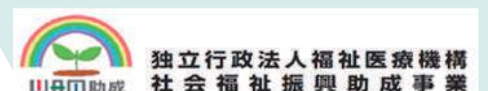
もうちょっと！二人で集めた枯葉で…



ダメ！と大きな声と、でてきた涙…



2歳半～6歳の異年齢の挑戦！急坂登り…



この事業は、独立行政法人社会福祉医療機構 WAM の助成金事業です

子どもたちと一緒に活動している「おやこ森のようちえん」のスタッフが撮影した動画6点を、パネラーと受講者のみなさんと一緒に視聴しながらディスカッションをしました。その中の一部の動画のエピソードとパネラーのお話をご紹介します。

## 動画 秘密のトンネル

### Episode

みつめた！トンネルだー！と、一人がくぐってみたら、他の子どもも真似して後に続き…次から次に、何度も何度も、くぐり続ける！遊びが始まりました。

### Panel discussion

理学療法士  
得原さん



文科省やスポーツ庁で言われている「36の基本動作」は、できれば幼児期にこの位のいろんな種類の動きを体験しているといいよね、「自分でやろう」「できるかな」位のところまでいっているといいよねという動きを一覧にしたものです。昔は普通の生活の中でもいろんな場所で身体を動かすことができたので、いつのまにか身につけていたんですが、今は多様な動きができる機会が少なくなっていますね。小学校の身体検査などで、しゃがめない子どもが増えているということもよく聞かれることです。

この動画で子どもたちがやっている「くぐる」も36の基本動作にあります。しゃがんだまま動く「くぐる」は、股関節を大きくまげて、足関節、膝関節、足の三関節をすごく大きくまげてという結構キツイ動きです。でも、こんなふう自然の中で遊びながら、「くぐりたい！」という楽しい気持ちで、こんなに多様な動きができることがいいですね。みんなやりたいから一生懸命で、すごくいい身体の使い方をしています。36の基本動作ができるようになるために、習いに行けばいいというものじゃないですよ。

作業療法士  
元住さん



例えば、地震で「机の下に潜ってー」と言われたときに、自分が入れそうな机の下はどれか？深く考えなくてもわかるのは、自分の体の大きさや動かし方を大体わかっているから、専門用語でいうと身体図式やボディイメージが育っているからです。この動画でトンネルをくぐっている子どもたちは、ちょっと頭がひっかりそうになったり、この隙間なら他の子を追い抜けるかとか、ぶつかったからこうしてみようと考えたりしながら、物と自分との関係を学習しているんですよ。幼児期は、自分の体の大きさとか体の動きを把握することが必要で、それはこうした遊びの場面で育つことです。



## 動画 おさかなつ〜り

### Episode

棒を持って坂道を登る子を見ていた3歳の子が、自分も！と、長い棒を引っ張ってきて坂を登り始めました。でも、その棒はとて長くて…思うようには登れない。すると急に「おさかなつ〜り」と言い出して、長い棒の先を坂道の下の方に向けました。その子の頭の中では、坂の下は海で魚が泳いでいるのでしょうか。自然の中遊んでいると、木の棒も木の実も土も、いろんなモノに変身します。子どもたちの想像力って本当にすごいなあって思いながら、私たちも子どもの遊びに世界入って一緒に楽しませてもらいます。

### Panel discussion

臨床発達心理士  
齋藤さん



自然の中で遊んでいると、棒はいたるところに落ちています。子どもは棒が好きなので、必ず拾いますね。最初は小さな棒切が段々大きい棒になる。そうすると親心としては、危ない、ケガをさせたらどうしようと心配になる…。でも、この時は誰も棒を持つことを止めていません。「そんな長い棒は無理でしょう」「もっと小さいのにしたら？」とも、誰も言わずに見守っていました。だから、子どもは自分で坂の途中まで行って、尻もちをついて座った途端に“おさかなつ〜り”になったんですね。もし誰かが止めていたら、あの発想は出てこなかったかもしれません。

子どもは、本当に自由に、遊びたいように遊びながら、自分の世界を広げ、創り出していきます。発達心理学的には、見立て遊びやふり遊び、〜ごっこ遊びができるようになるのは、認知的な発達が進んでいるということです。

作業療法士  
元住さん



新しいこと、特に身体の動きを伴うことを意図的にやってみるとき、頭の中ではまず「やりたい」ことをイメージする、次にどうやったらできるのか？動きなどの順序を計画する、そしてやってみる。この一連のプロセスを、子どもたちは意識しないで、遊びの中で日々繰り返してやっているものです。そして、やってみて上手くいかない時には、その都度修正してやり方や計画を変えていく。この動画の子も、途中で計画を変えながら、最後まで楽しんでた。こういう体験が、ちょっと難しそうでも「やってみよう！」という気持ちにつながるのだと思います。こうしたプロセスのある遊びをどんどん出来る子もいれば、感覚のアンバランスさや、脳の処理機能がうまく働かずに、苦手な子もいます。でも、どんなタイプの子にも、成功体験は大事です。自由な外遊びの場面は、失敗がない、できないの評価もない、計画と違ったとしても楽しめちゃう要素が豊富にある、だから、達成感や満足感につながりやすい、自信も育つ。本当にいいです。





動画

## 私の一！私もやりたいのー！

### Episode

大きな石を「恐竜のたまご」に見立てて置いておいた場所に、翌週みんなで行ったら、その石をほかの子が欲しがって…怒鳴って、石を投げて、泣いてというケンカになりました。でも、当事者の二人の段々と「自分、やっちゃっているのかな…」と感じたようで、他の子どもたちも事態の収束のために？（笑）動き出しました。

### Panel discussion

臨床発達心理士

齋藤さん



ケンカが始まりそうになると、大人はどっちが良い悪いとジャッジをして、ケンカにならないようにしますよね。でも今回、島田さんはそういう関わりをしないで、泣いている子が泣ききること、泣きながらも自分の中で気持ちが収まっていくことを、ただ側にいて待った。石がほしくてしょうがない子の気持ちにも寄り添っている。ほしい、あげたくない、やだ、なげられた、悲しい、そういういろんな子どもの思いが展開しているなかで、大人が解決するのではなく、子ども達自身が自分の思いの中で落ち着いていくことが自然と起きていましたね。他の子たちも、泣き続けている子のことが気になるわけで、それぞれが何かを感じていたのでしょう。同じような石を持ってきて泣いている子の側に置いてみたり。一人ひとりが感じたこと、考えたこと、それを行動にしていることがすてきですね。自分の負の感情をわーっと出せる、きちやだめーとか、とっちやいやだーと言える、負の感情を表出できることも、遊びの大切な役割です。

とはいえ親は、子どもの負の感情を見ると、ザワザワして、我慢できなくなっちゃうわけです。その自分のザワザワした感情を取めたくって、なだめて泣き止まそうとしたり、つい怒ったり。自分の負の感情に付き合いきれなくて間に入ってしまふこと、多いですよー。

理学療法士

得原さん



押して突き飛ばしちゃった場面がありましたけど、子どもの力ってそんなに大きくないので、ちょっと尻もちをつくくらい。ちょうど周りに危ない物があって頭をぶつけない限り、救急車はまずないです。体と体がぶつかったり、たたき合っちゃったり。そういうことを小さい頃からやっているから、ぶつかられたら痛いとか、相手を倒したらドキッとすわるわけで、だから次からは、倒すほどの力で押したらいけないっていう気持ちがじわじわと出てくる。やり合ったりひっぱり合ったりしながら、力加減や人との付き合い方を一から学んでいるのだと思うと、ケンカができることは、お互いにお互いを成長させるすてきな仲間だと思います。



動画

## 急坂に行く！

### Episode

2歳後半から1年生の4人が、「ここを行ったら近道だね」と登り始めた坂がとても急で…何度も滑ったり転がったりしていたら楽しくってなっちゃって！登ったり降りたりすることが遊びになりました。最初は自分が登り降りするだけ精一杯だった6歳たちが、そのうちに3歳の子をサポートする姿も見られます。

### Panel discussion

作業療法士

元住さん



大きい子たちの動きに焦点を当ててみると、急な坂道を自分で体を支えて登りながら、ちびっこにも声をかけて、手をつないで登るといって、「〇〇しながら～する」をしていました。これができるためには、ワーキングメモリーや注意の分配という力が必要です。ワーキングメモリーは、例えば何かを実行しようという時に必要な情報を、頭の中でアクティブな状態にして、いつでも取り出せるようにしておく力です。注意の分配は、同時にいろいろな物事へ上手に注意を向ける力です。動画の場面であれば、最初は自分が登る手足の位置やどの道から行こうかということに注意を向けて登り降りしていたのが、後半はそうした体の動きが結構上手になってきたので、ちびっこの方にも注意を向けることができるようになっていました。遊んでいるなかで「こうしてみよう！」と思いつくアイデアも、まわりに気づくことから始まります。自分の目の前の物事だけに注意が向いていると、浮かぶアイデアも少ない。大きい子たちは、自分の身体を使いこなし、いくつもの情報を抜き出す力があるから、全体を捉えて、いろんな状況に気づいて、遊びを展開し、お友だちとのやりとりにも発展させることができていました。

理学療法士

得原さん



大人でスポーツをする人は、坂道でのトレーニング経験がある人もいらっしゃるかもしれませんが、子どもたちは登りたくて登っているからこそ、何回も繰り返せる、自分の力いっぱいやり切っているところがいいですね。幼児の脳って、まだまだ我慢するとか、自分がやりたくないことを言われてやるっていうことはなかなか制御できないんです。我慢に向いてないというか、我慢のための脳の部分がまだまだ成長の途上なので、我慢してやらせるのではなくて、こんなに風に体を動かせるのがいいですね。「36の基本動作」をご紹介しましたが、この急坂登りには、登る・滑る・友だちを掴む、何か持って運ぶ、持つ等のいくつもの動作組み合わせさせて、一つの目的を達成しています。こういうことって、例えばスポーツクラブで体験させようと思っても、プログラム化が難しいんですよ。自然の中で、自由に遊ぶ遊びってすごいですよねー。



## パネラーのみなさんから、「おやこ森のようちえん | おひさまとことこ」事業について、感想や評価を頂きました。

### 臨床発達心理士 齋藤正恵



自然に恵まれた都会の中の都立公園、まるで森の中のような自然環境も素晴らしいですが、何よりもそこに異年齢の子どもと親が集い、子ども同士が共に遊び合い、その遊びに寄り添う保育士プレーリーダーの存在が素晴らしいと思います。親子だけで公園を散策して小動物に触れたり、坂道泥道を歩くことはできますが、親子だけでは生じない仲間との関係が、子どもの育ちを促していく、そして親も育っていく。

幼稚園や保育園に預けていると、保育者から聞く子どもの成長は想像の世界ですよね。「おやこ森のようちえん」では、自分がその場において、子どもの変化や成長を目の当たりにすることができます。子

どもの力を信じて待つプレイリーダーの姿をみて、感じたり考えたりする体験も貴重です。

子どもだけが参加する「預け合い」は、親同士の信頼関係があるからこそ成り立つ企画。子どもたち、自分の親が居る時と居ない時では、表情が違うんですよ。「預け合い」は、我が子だけを見ていては気づくことができない、子どもの持つ力や可能性を信じられるようになる良い機会です。

子どもは親だけでは育てきれものではありません。外に出て、親以外の大人や他の子どもたちとの触れ合いを通して親も子も育っていくのです。特に運動量が増え脳の発達が著しい2歳過ぎから7歳までの子どもの育ちを保障するためにも、「おやこ森のようちえん」での親子の体験は意味深いものだと思います。

### 作業療法士 元住野花



『どの子どももイキイキしている』。葉っぱに埋もれ全身で楽しむ子。周りをじーっと見ている子。虫採りに夢中な子。それを見守る大人たちの眼差し。「おひさまとことこ」を初めて見たとき、自分までワクワクし、笑顔になりました。

日頃、未就学児の発達支援の場で、苦手さや困りごとといった課題解決アプローチを効果的に行う際、こちらが設定したプログラムの中で子どもの力を最大限引き出すことは、個別支援に求められている専門職の役割だと考えます。

でもその先に願うのは、何かをやってみようと思える自信をつけてほしい、自分っていいなと思ってほしい。そして、好きなことや自分らしさを大切にしてほしい。それが、これから生きていく力になると思うからです。

森の中を親子で散策しながら遊ぶ「おやこ森のようちえん」。決まったプログラムはありません。土、水、草木、急坂、緑のトンネル、生き物との遭遇…様々な感覚を味わい、頭を働かせ、心が動く。心身が育つ栄養素となることは勿論、そうした体験の中で自分の「好き」を発見したり、興味の幅が広がったり。自然環境には、そんな可能性が無限にあるのではと思います。そして、自然を相手に大人も子どもも、発達に凸凹のある子どももそうでない子どもも、皆でその瞬間を共有する。幼児期に共に遊び育ちあい、全てひっくるめて認め合う。「おやこ森のようちえん」は、一人ひとりが自分の好きなこと、自分らしさを大切にする土台を作っているのだと思います。

### 理学療法士 得原藍



子どもの身体の発達は、その後の人生を健康に過ごす鍵になると言っても過言ではないと思います。運動習慣の有無や、本人の運動嗜好が、明らかに健康寿命に影響することが科学的にも示されています。しかし、日本では多くの子どもたちが、小学校に入ると1日数時間座って過ごすことになり、小学校高学年にもなれば塾通いでさらに運動時間が減ってしまい、運動時間が足りていないのが現状です。また、乳幼児期も同様に、運動そのものの機会が少なくなってきています。

2019年4月24日、WHOが『5歳以下の子どもの身体活動と不活動、および睡眠についてのガイドライン』をより読みやすい形にして、提言としてWebで公開しました。そのガイドラインから一部抜粋すると、

1-2歳の子ども、最低でも1日3時間、さまざまな方法で、さま

ざまな強度（適度な強度のものから激しい強度ものを含む）の身体活動を行うべき。多ければ多いほどいい。

3~4歳の子ども、最低でも1日3時間、さまざまな方法で、さまざまな強度の身体活動を行うべき。少なくとも60分以上は一定強度以上、激しい運動を含んだ時間が必要。活動時間は多ければ多いほどいい。と、明らかに日本の子どもの生活に運動時間が足りないことがわかると思います。このガイドラインは主に世界中の都市部に住む子どもたちの生活習慣に対して建設的な示唆を与えるものですが、質・量ともに日本の子育て施策には運動への配慮が不足しているのです。

「おやこ森のようちえん」では、そんな子どもたちを無理なく自然の中に誘い込み、さまざまな運動が彼ら自身の好奇心から導き出されるような工夫がたくさん散りばめられています。子どもたちは運動を「やらされる」のではなく、気づいたら駆け回っているのです。自然の中での活動であることももちろん要因の一つではありますが、そうやって全身を使って遊べる環境を、スタッフや親が協力して作り出していることも、大きな価値のひとつだと考えます。

# 受講者の感想

動画で場面を共有しながら専門職がそれぞれの視点からディスカッションをするという、初めての講座スタイルでの開催でしたが、「わかりやすい」「納得感がある」等、多くの方からよい評価を頂いています。

また、オンラインでの開催が功を奏したのか、幼児を子育て中の保護者の方や子育て支援者・プレーリーダーだけでなく、保育園で働く保育士の方、学童保育指導員の方、元小学校教員の方等幅広い属性の方にご参加いただきました。

自然の中での外遊びやお友達と関わ  
りながら遊ぶことの相互作用を改めて  
実感しました。子どもは身体の使い方  
を遊びの中で実践しながら学んでいる  
最中だということ、自然の生き物と触  
れることの重要性、自然が多種多様な  
おもちゃになり遊びが生まれるという  
ことが分かりました。

保護者

好きなものは好きでいい、苦手なも  
のは苦手でもいい、1人でも集団でい  
てもいい、親と子の感情を分けて、でき  
るだけ見守ってほしいです。実際でき  
るかまだ分かりませんが、意識してい  
るだけでも違うので、今回の講座はと  
てもためになりました。

保護者



親子で遊んでいる時は、周りを気に  
して子どものしたいことを止めること  
があります。こういった、みんなで見  
守っている環境で自由に遊ぶことが、  
子どもの成長にも親の成長にも繋がっ  
ていくのだと感じました。

保護者

つい習い事やおもちゃの数を増やし  
がちですが、自然での遊びは無限に可  
能性が広がると思いました。母子分離  
でお任せするだけでなく、一番近く  
にいる親が同行することで我が子の遊  
びやお友達との関わり方を見て、スタッ  
フの方から学べる機会があることは大  
切だなと感じました。

保護者

ケンカの動画、あの状況で我が子が  
あそこいたら…自分は耐えられただ  
ろうか？多分無理だったろうと。周り  
にいた大人が注意しないで、冷静に対  
応されていたことがすごいです。

「子どもが負の感情を出すことも大  
事。親は子のケンカ等を止めようとす  
るが、それは親自身が辛いから。親、  
本人のため止めに入っている」という  
お話に納得しました。

保護者

子育ては大人の価値観の中で先回り  
して、あれこれ言わなくてもよい。信  
じていれば、子ども自身が遊びの中で  
身体を育て、人との関わり方を学んで  
いくのだということ。動画を通して  
実感しました。保育園、幼稚園の先生  
方にもぜひ見てほしいと思いました。  
子どもと向き合う大切な視点として。

元・保育士 / 現・子育て支援者

「子どもの喧嘩の仲裁をするのではな  
い」という言葉が印象に残りました。  
大人の気持ちもザワザワするから、や  
めさせよう！どうかいい方向へ持つ  
ていこう！と思っているだけ。周り  
にいた石を持ってきた子たちと、気持  
ちは一緒。でも、大人だから…一つの  
言動が子どもに大きく影響し、子ども  
自身の体験や学びを奪ってしまうこと  
になる。日本中の保育者や教育者、そ  
うした仕事を目指している学生にも  
知ってほしいことだと思いました。

元・小学校教師 / 現・学童保育指導員



小学生の様子と重なる話が多く、良  
い学びになりました。幼児期からの発  
達が小学生に繋がってきますが、体験  
の少なさから来るボディイメージ、体  
力、感触や生き物とのふれあいの乏し  
さ、友達とのコミュニケーションで相  
手を思う、想像する、よく観察する力  
の乏しさを感じています。

プレーリーダー

子どもたちと向き合う時の大人の姿  
勢について、子どもたちが出してくれ  
ている、泣く、ため息、アイコンタク  
トなどのひとつひとつを、私はキャッ  
チできているか？…考えさせられまし  
た。

子育て支援者

PT、OT、心理、保育士の方がそれ  
ぞれの立場で子どもの発達を捉え、意  
味のある一つ一つの姿を読み解いて頂  
いたことは、今まで保育士として大切  
にしてきたことでもありましたが、改  
めて考える良い機会となりました。危  
険への配慮、大人のジャッジ、ザワザ  
ワ感など、現場では葛藤の日々です。

都会の保育園、長時間保育などを  
理由にはいけないと思いつつ、限界  
も感じています。もっと子どもの力  
を信じ、育ちを信じる大切さ、また、  
共に子どもを見守る子育て支援の大切  
さも感じました。

保育士

# おひさまとことこ スタッフの声

スタッフになったばかりの頃、「今日はいかない」と自転車から降りないAちゃん(3歳)に出会いました。こんなケースの際にはとスタッフ間で共有していた対応の通り、「今日は行きたくない気分ね」と子どもの気持ちに寄り添う声かけをしながらも…動揺しないで“待つ”…と、心の中で何度も唱ほどドキドキしていました。

しばらくすると他の子がテントウムシを見つけたので、「テントウムシだよ!」とAちゃんに声をかけてみたら…まるで何事もなかったように自分から自転車を降りて、テントウムシを見に来ました。そして他の子と一緒に走り始めました。切り替えて動き出す“きっかけの声かけが成功しました。

今の私は、なかなか動かない子がいても、もうドキドキしません。たとえ、私の声かけが響かなくてもね。子どもたちは、自分のタイミングで、自分のやり方で、動き出すので。

幼稚園教諭4年を経て  
子育て支援へ2年目

保育園で働いていた頃も、「子どもが主体的に遊ぶ」ことを一番に考えていました。でも、穴掘りに没頭する子、1時間近く「のびる」探しに夢中になる子、「次は〇〇をやろう!」と大人の想定を超えた遊びをどんどん展開していく子…という子どもたちの姿を目の当たりにして、「保育園には、時間と環境の制限がたくさんあったんだなー」と感じます。保育園は生活の場で、園庭は森のような自然ではないのですから、違うことはわかっています。でも、時間の余裕と豊かな環境があれば、大人が指示や提案をしなければ、子どもはこんな風に遊びを広げいく、主体的に遊ぶ力をもっている!!ことを、改めて実感しています。私は最近、子どもの自由な思いつきすべてに対して、心から、そしてワクワクしながら、「いいね!」と言えるようになった気がします。

保育経験30年以上を経て  
子育て支援へ2年目



活動後は、スタッフの「振り返り」をします。例えば「BちゃんがCちゃんを突然叩いた」という場面があった日は、「Bちゃんは、どんな気持ち(Feel)で、何を考えて(think)いたのかな?」と、子どもの行動(Do)の理由を探ります。探るときの手がかりは、どんな表情で、どんな風だったか?というBちゃんの(How)です。自分の気持ちや考えを言葉にできない子どもの非言語のコミュニケーションがHowなので、側に居る大人が見逃しちゃいけないポイントです。「振り返り」を繰り返しながら、例えば「嫌なことがあっても手を出すべきじゃない」等、自分は様々な「価値観=すべき」をもっていることに気づきました。そして、大人社会の常識的な価値観の中には、子どもが育つために必要な体験の機会を奪うこともあると気づきました。今は、子ども同士のトラブルや、ちょっと危なそうな場面に出会った際には、まずは子どものFeel、Think、Howを慮ることを優先しています。

専業主婦から  
子育て支援へ13年目

毎週通ってもらう継続的な活動なので、回を重ねるうちに、一人ひとりの個性や発達状況がわかります。そこで、保護者の方と相談しながら、「次は〇〇の遊びができる場所に行こう!」とか、「Dちゃんと一緒に〇〇をしたら盛り上がりそうだよね」と二人をつなぐ作戦をたてるのが楽しいです。時には、保護者が気づいていないその子の素敵な個性を伝えて、その力が思う存分に発揮できるように家でもこんな声かけをしていこう等、日々の生活との連携が生まれることもあります。

幼児期に育ててほしい子どもの姿や能力を「10の姿」にまとめた新しい保育指針がありますが、「おやこ森のようちえん」で、その子の個性が輝くために、好き!得意!が増えて、他の子と一緒に楽しい!体験がたくさんできるように、子どもが「やりたい!」ことをサポートしていると…いつの間にか、10の姿が目指すことをクリアしているなー、子どもは自分で育つなーと思います。

保育経験8年を経て、  
子育て支援へ6年目



## これからの保育シリーズ「10の姿で保育の質を高める本」 汐見稔幸・中山昌樹 / 風鳴舎

これからのAI社会を生きる世代には、

- ① 身体を使うこと、身体で覚えること等が大好き!
- ② 自分で考えること、工夫すること、討論することが等が大好き!
- ③ 人と関わって何かをすることが大好き!人と共感しあうことが大好き!

という人間的な資質を幼いころからしっかりと育てていくことが、逆にとても大事になってきます。この3つの大好き!を、もう少し具体的に目標化していくと、そうです、10の姿に近づいていきます。こういう風に見ると、10姿を意識して行う保育が、21世紀中盤社会の保育のモデルとなる、ということもある程度納得がいくのではないのでしょうか。(本文より一部抜粋)



## 「おやこ森のようちえん」で大切にしている 子どもの遊びに関わる“大人のスタンス”

- 思いきり動けて、興味関心が刺激される環境（＝自然・人・コト）を用意する。
- 子どもが自分で遊び始める、自分で考えて決める、主体性を尊重する。
- 一人ひとりの個性（＝感じ方、興味関心、遊び方等）を尊重する。
- 子どもが満足して遊び終わるまでの時間を守る。
- 子どもの探求と思考の広がりを邪魔しない。
- 子どもと一緒に遊んで、楽しい！を共有する。
- 子どもと一緒に自然に親しみ、驚嘆し、命を感じる。
- 子どもが状況を理解できるように説明をする。
- 子どもが自分の気持ちを認識したり、人に伝えたりできるように手伝う。
- 子どもが困っていることに気づき、子どもから求められた手助けする。
- 「ねえ、見て！」と共感を求められたら応える。
- ネガティブな感情を乗り越えようとしている時は、自分で頑張れるように見守る。
- 子ども言動に対して、大人の価値観の物差しで良い・悪いを決めない。
- 危険に関する知識をもって、無暗に心配しない、大きなケガを100%防ぐ。

## 子どもが遊んで育つ、 子どもの時間を守っています

保育士・プレーリーダー 島田かおり



「乳幼児期の育ちに遊びが大切だ」と言うことには、誰でも頷けます。しかし、具体的にはどのように遊ぶと子どもが育つでしょうか？

例えば、「これから、折り紙でチューリップを折りましょう！見本は…」 「今日は、全員で鬼ごっこをしますよ！ルールは…」と、大人が子どもに教えたりやらせたりすることも、一般的には遊びの時間と呼ばれていますが、『おやこ森のようちえん』が大切にしている”子どもが主体的に遊ぶ“とは違います。

子どもが主体的に遊んでいると飛び出す、「あ、いいこと思いついた！」 「じゃあ、こうしたらどうかな？」等の言葉は、子どもが自分で考えて夢中になる、 試行錯誤や創意工夫をする、“遊びが始まる合図”です。こうした言葉はなくても、遊びの始まりは、子どもの表情を見ればわかります。“いきいき”という言葉がピッタリな、嬉しそうで、楽しそうで、真剣な表情です。

大人が考えたことを子どもにやらせようとする、上手くできない子には、もっと丁寧に教えてあげようと頑張るし、何かを思いついて一人だけ違うことを始める時には注意もします。そして、想定した通りに子どもが遊んでくれないと、ガッカリしたりイライラしたり…。こういう時、“主体”は子どもではなくて、大人にあります。

『おやこ森のようちえん』が、自然の中を、子どもたちの興味関心の赴くままに歩き回りながら遊ぶスタイルを選んでいるのは、子どもが主体的になりやすいからです。歩きながら次々に出会う自然に刺激を受けて、子どもたちの発想も、奇想天外な遊びの展開も、大人の想定枠を軽々と超えていきます。子ども主体の遊び時間は、一言で言えば、何でもあり！やらなきやいけなことも、上手も下手もない。だから、大人のガッカリもイライラもない！私たちスタッフが心がけていることも、子どもたちの頭と心と身体で起きていることをしっかり見て、その子の興味関心が深まり広がるような刺激を、自然の魅力を活用しながら提案してみるくらいです。

『おやこ森のようちえん』では、“気になる子”と言われる子ども、ご機嫌で遊んでいます。やりたい！ことを自由にできますからね。家で一人で自由気ままに過ごす時間に比べて、自然 × 仲間との存在は、興味関心をくすぐる刺激の量も質も違います。だからいつの間にか、他の子たちと関わるようになるし、友達と一緒にいると楽しい！ことがわかると、集団で行動する機会も増えます。そして保護者の方から、「参加した次の日から言葉が出ました！」「ここだと、私の側から離れて遊びだしました！」「今日は一度もかみつかなかった！」等と、子どもの変化への驚きや、我が子が心地よく過ごしている姿への安堵の声が聞かれます。

こうした子どもの変化は、スタッフ冥利に尽きる喜びです。そして、子どもたちがどんどん変わっていく、成長していく姿を日々目の当たりにする中で、子どもは「自ら育つ力」を持っているのだと、つくづく実感しています。

私が『おやこ森のようちえん』を始めたのは、「生きていて楽しい、生まれてきてよかった」と感じる体験をして欲しいと願っているからです。長い人生、様々な困難に出会うこともあるでしょう。そんな時にでも、「自分ならだいじょうぶ」と思える自己肯定と、「今は辛けれど…またいいこともあるよ」と思える未来への希望を、ハートの根っこにもっている人になって欲しいからです。

人が感じる感情は、誰にも教わることはできません。大人に、「これ楽しいでしょ!？」と言われてもね(苦笑)。感情は、子ども自身が、一つひとつ体験しながら、感じて、味わって、乗り越えて、獲得していくものです。ですから、特に幼児期には、子どものペースで過ごす時間が必要なのだと思います。子ども自身が自分の感情に向き合うために、他に何も予定がない、せかさされない、ゆったりとした時間。『おやこ森のようちえん』は、そんな子どもの時間を守っています。



## NPO法人 PLAYTANK

PLAYTANKは、0～3歳の親子のはじめての外遊びをサポートする外遊び型子育てのひろば『おひさまびよびよ』、赤ちゃんから小学生・中学生が誰でも無料で遊べる冒険遊び場『練馬区立こどもの森』『光が丘プレーパーク』、民設学童保育『あそびーむ』、民設子育てのひろば『プレパひろば』等の運営を通して、地域の子どもの育ちと子育てを、外遊びで応援しています。

〒179-0071 東京都練馬区旭町 1-16-1

E-mail : [contactus@playtank.tokyo](mailto:contactus@playtank.tokyo)

WEB : [playtank.tokyo](http://playtank.tokyo)

企画：島田 かおり 編集：中川 奈緒美

撮影：寺本 章恵